

鎌倉期に於ける新佛教の概要と浄土往生思想

後 藤 昌 弘

鎌倉時代の仏教は、民衆仏教であり、庶民に対して説いた教へであつたから、教理はきつめて簡易である。しかも性格は短刀直入的、実践的性格を持ち、自意識の思想に立脚した宗教を鼓吹する所にその特質がある。

禅宗にしても浄土宗にしても、鎌倉時代の新興宗教は、何れも個人意識が特に発達してゐる處に思想進化の足跡が見受けられるのである。いわゆる禅の如きは直接人心見性成仏を主張し、浄土教の如きは、自己の罪惡感を脱却如く、此等はいづれもその觀念は異つてゐるけれども、共に人間的の自覚に立脚して教を立てゐる所に特異性を見出すことが出来るのである。

又、政治的に云つても、公家政治から武家政治への変遷の過渡期でもあり、いわば封建社会の形式の第一歩の段階に於つたのである。

具體的に簡略するならば、平家が置の浦に滅したるを一期として、源賴朝を中心とする鎌倉幕府を見るのである。

武家政治は、平清盛によつて始められたものではあるが、實質的に見れば、必ずしも純然たる

武家政治的風格を見せていたとは極言出来ない。なぜならば、その形式に於いて武家的であつたにすぎず、その内容は多く公家的であり、貴族的風書が濃厚であつたからである。

何れともあれ、源賴朝による鎌倉幕府の成立は、その内容はともかくとして武家政治の風格を冠^{かん}最初のものであつたと云ふことが出来るであらう。

當時の文化を見ると、いねゆる藤原貴族によつて美化されたる院政時代の文化は武家時代に受けつがれたるに至り、浄土往生思想の影響を多分に受けた所の足跡が見受けられる。

即ち、法然の浄土宗宣言に始まる榮西、一遍、親鸞、道元、日蓮と相ついで絶出したる新仏教の現象は、當時の武家時代の新しい文化の動きの中に伝統的な、しかも貴族的公家文化が底流にありながらも、武士による現実的生活への時代的傾向とよく融合していつた経路として、如実に世風の反映を見る事が出来る。

換言すれば、解明にして直截な、そして実質的であつた新仏教の性格的特徴が武家時で要素にして剛健なる武家社会の中に急速に発展していつた原因となつたのであらう。

そして新仏教の性格は仏教の貴族社会との主流となつたのに比して、広く民間社会に浸透していつたところに性格的相違のある事を冠^{かん}のかしてはならない。

云ねばヨトロッパに於ける宗教改革に等しき新時期とする歴史的意义を持つ重大なる現象であつたのである。

即ち眞言、天台を主流とせず旧仏教は自力聖道の道をかゝつたのに際し、新仏教は他力浄土の教を力説したのである。

又、新仏教に於いては、男女を平等視した事は古代の仏教よりの解釈といつてよい。従来ま

では聖山聖地には女人禁制が行われていたのであるが、源空、親鸞、一徹、日蓮等は婦人の入信救済を認め、男女の間に差別を置かなかつたことによつても、旧仏教との差違はわかる所である。

これによつて、我々は新仏教の性格を見る事が出来ると共に、当時の時代世想を充分にうかがふことが出来る様になる。

何故なら、法然によつて唱導されたる他力易行による浄土思想が（野村翁即往生）源平盛衰と云うあわやしい動乱の世相に、直面したる一般庶民の人生観、世界観に深く喰ひ込んでいったからである。切なる無常観は、やがて厭世思想をまねき、結果、厭離穢土、欣求浄土の思想は必然的に起り得るのである。

こゝに法然の他力易行善修念仏による往生思想は躍如として、庶民生活の中に輝きわたつたのであらう。

源氏、平家の闘争は顕著なる民族性の表現であり、その動乱の中で低徊したる庶民の生活感情、又は、人生的観念は典型となる國民思想の現れであつたと見ることも出来る。

かゝる源氏の往生専業の思想は同時代の文化に多大の影響を及ぼしているのを見ても、充分感ぜられる所である。

法然の浄土宗は、承安四年といわれる。即ち高倉天皇の御代であり、平安末期にあたる。その当時は平家の勢力ようやく傾き、衰滅の気運が次第に高まりつゝ、あつた頃であつて、平家の最後は其の没落の帰因となり、清盛の榮華生活は、木曾義仲の京都めに始まる源氏の攻勢に、跡形もなく西海の糠屑と消え、はなやかなりし最後政治は崩壊して野人犬衆を標榜する

武家政治が抬頭し、人心一表して新鮮な空氣の中に勇躍する時代となつて來たのである。即ち人心はこの動亂の巻に直面し、その人生觀、世觀、宇宙觀を一表させ、厭離穢土、欣求淨土の思想が庶民層に波及したのである。即ちこれが淨土思想であり、当代の世相を如實に物語つてゐる所の「平家物語」では、その冒頭より

「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅雙樹の花の色、生者必衰の理を表わす云々。」

と書き始められて、有為転変の真相を如實に表現してゐる筆法は

「淨土思想の影響に基づくものと云うべきであると観、又、すべてのものが滅んで行くのが人間の世の姿であると観る無常思想と、われ／＼はひとすじに阿弥陀如来を信じ、その御力にすがつて末世には極樂淨土に生れて、何の苦痛もない安樂な生活をしたいと、觀う往生思想、この二つの思想が表裏一体となつてゐるのか、淨土思想の根幹である。」

(平家物語)

この思想に基づいてゐるが故に、法然の専修念仏の思想は漸の如く庶民層に受け入れられていつたのであることは當然の現象であるとうなづける次第である。

換言すれば、仏教的因果応報思想が潦平盛衰と云う、有為転変によつて見事に裏証され、その結果末世極樂往生思想の抬頭をみたわけである。